

『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』をめぐり、キリスト教徒間の議論についての覚書

加藤 知子

2004年5月16日付けの中日新聞サンデー版では、アメリカ・ミシガン州において、「宗教右派の要望で一部学校区で、魔法使いが主人公の『ハリー・ポッター』本が授業で使用禁止。学校図書館で親の許可がないと貸し出し禁止に」と報じている。更に、藤城真澄&ホグワーツ魔術研究所著『マグル的<ハリー・ポッター>魔法序説概論』24ページには、『ハリー・ポッター』本は「一部の保守的なキリスト教徒からはなんと悪魔的な本として危険視されている」とか、「ペンシルバニア州では、焚書（ふんしょ）などという蛮行が」行われていたなどの記述が見られる。

83%のアメリカ人がキリスト教徒であると自認しており、キリスト教では、魔法・魔術を禁じているため¹⁾、魔法使いが主人公であり、魔法・魔術を中心に据えたストーリーを展開させている『ハリー・ポッター』本に対して警戒心や嫌悪感を抱く人々がアメリカに多く存在することは、別段不可思議なことではないだろう²⁾。

しかしながら、『ハリー・ポッターと賢者の石』と期をほぼ同じくして映画化が開始された映画『ロード・オブ・ザ・リング』の原作、オックスフォード大学教授 J. R. R. Tolkien による『指輪物語』(原題 *The Lord of the Rings*) に関しては、その中で魔法使いやエルフ、ドワーフなどが活躍するにも関わらず、『ハリー・ポッター』のような焚書騒ぎには至っていない。

キリスト教徒の間では、『ハリー・ポッター』、『ロード・オブ・ザ・リング』共に、信仰の糧となるのか、妨げとなるのかという視点から、その<信仰上の

> 妥当性が議論されている。両者に関するキリスト教徒たちの立場は現在、以下の三つにまとめられる。

1. 『ハリー・ポッター』、『ロード・オブ・ザ・リング』共に、キリスト教徒が読むのにふさわしいとする立場。
2. 『ロード・オブ・ザ・リング』はキリスト教徒が読むのにふさわしいが、『ハリー・ポッター』は、信仰上の妨げとなるとする立場。
3. 『ハリー・ポッター』、『ロード・オブ・ザ・リング』共に、キリスト教徒が読むのにはふさわしくないとする立場。

一番目の立場に立つのは、Connie Neal、二番目の立場に立つのは、Richard Abanes、三番目の立場に立つのは、Berit Kjos などがいる。

このように、キリスト教徒の中でも、両作品に対する立場が複数存在するのには、いくつかの理由が挙げられるが、それらは、以下のようにまとめられよう。

1. 両作品の解釈が複数存在するため。
2. 両作品がキリスト教徒にとって読むに相応しいかどうかの規準が複数存在するため。
3. 両作品の著者の信仰上の立場がキリスト教的か否かという点で、意見が分かれるため。
4. キリスト教徒の中で、何を以って聖書的・福音的とするのかについての立場が複数存在するため。

『ロード・オブ・ザ・リング』よりも、『ハリー・ポッター』に対してのほうが、厳しい態度で臨むキリスト教徒が多いのは、次のような理由によるものと思われる。

1. 『ロード・オブ・ザ・リング』と『ハリー・ポッター』とでは、モラルという点で違いが見られる。『ハリー・ポッター』では、いわゆる<善い>登場人物が、嘘をついたり、盗みをしたりなどの悪戯をかなり頻繁にすることに加え、それらの悪戯が厳しく戒められることはない。一方、『ロード・オブ・ザ・リング』では、<善い>登場人物が頻繁に悪戯をしでかすことはなく、悪戯をした場合は、戒められたり、悪戯のために、悲惨な出来事が起こったりするという設定になっている。
2. 『ハリー・ポッター』では、魔法・魔術がストーリーの中心に据えられているのに対し、『ロード・オブ・ザ・リング』では、魔法使いやエルフが登場するにも関わらず、魔法・魔術はほとんど使用されず、これらがストーリーの中心テーマとはなっていない。
3. 『ロード・オブ・ザ・リング』作者のJ.R.R. トールキンはカトリック信者であって、イエス・キリストによる贖罪の必要性を公言していたが、『ハリー・ポッター』の筆者であるJ.K. ローリングは、自らの信仰の立場を、トールキンのように明らかにしていない。

以下に『ハリー・ポッター』(第二話まで)と『ロード・オブ・ザ・リング』両作品を比較した表を示す。前者の方が後者よりも、魔法・魔術・死者との交流等を好意的に描いていることがわかる。

	『ハリー・ポッター』	『ロード・オブ・ザ・リング』
魔法・魔術	子供たちが学校で一生懸命学ばなければならないもの。魔術や魔法が上手く使えれば成績も良くなる。「良い」魔法使いも「悪い」魔法使いも、同じ魔法を勉強し、実際に使っている。	魔法使いのガンダルフやエルフなど、限られた種族しか魔法は使えない。それ以外の種族が魔法を使おうとすると、災いを招く。「良い」魔法使いは、「悪い」魔法使いの魔法は使わない。魔法使いのガンダルフでさえ、魔法は稀にしか用いない。

死者との交流	子供たちは日常的に死者と楽しげに交流する。	死者との交流は日常的ではない。アラゴルンは亡霊の兵士と共に戦うが、亡霊をてなづけることができるのはアラゴルンだけ。
暴力シーン	ヴォルデモートとの戦いのシーンはある。血で文字を書いたりする場面も写される。	戦闘場面が非常に多い。
悪魔(的)の登場	登場する	登場する
異性関係	今のところ異性関係の描写はメインではない。	ロマンスはあるがポルノではない。
モラル	ハリーたちは悪戯をするが、しかられないことが多い。	悪戯をすると、そのために悲惨な結果がもたらされる。
明確な福音の提示	なし	なし

『ロード・オブ・ザ・リング』の中にキリスト教的なメッセージが読み取れるか否かについては、筆者トールキンの信仰がキリスト教的か否かという議論と併せて検討する必要がある。

トールキンは、自らの信仰と執筆活動の関わりについて著したエッセイ集 *Tree and Leaf* (邦訳『妖精物語について』) の中で、「『キリストの誕生』は、『人間』の歴史の『幸せな大詰め』だった。『復活』は『神のキリストにおける顕現』の物語の『幸せな大詰め』であった。この物語は喜びに始まり、喜びに終わるのである。その『真実らしく見えるような内部の首尾一貫性』は傑出している³⁾と述べている。この箇所を見る限り、トールキンは、キリスト教信仰における、キリストの十字架上の死と復活の重要性を認識していたと推測することができ

る。それにも関わらず、『ロード・オブ・ザ・リング』及び筆者トールキンは、オカルト的であるとして、同作品を読むのは、キリスト教徒にとっては相応しい行いではないとするキリスト教徒もいる。

トールキンはカトリック信者であったが、カトリック教義は、諸聖人やイエス・キリストの母マリアを崇めるなどの「民間の素朴な宗教的感情とその表現」⁴⁾を内に含みながら発展してきたため、トールキンのキリスト教解釈の中に、イエス・キリストによる贖罪以外の、イエス・キリストの贖罪をややもすると曖昧なものにしてしまうのではと思われるものを見る者がいるとしても不思議ではない。『ロード・オブ・ザ・リング』にトールキンの信仰が反映されているとすれば、それはカトリックのそれであるはずである。福音主義者（プロテスタントの真髄を生きるキリスト者で、聖書の中に妥当性が見出せないもの、例えばマリア崇敬などは、異教的であるとする）の中には、カトリック教義を、それが持つ〈イエス・キリストによる贖罪以外の〉要素の多さ故に、キリスト教とは認めない者もいるため、彼らによれば、『ロード・オブ・ザ・リング』は、カトリック教義がそこに反映されていたとしても、それはキリスト教的ではないことになる。それどころか、彼らによれば『ロード・オブ・ザ・リング』はキリスト教的なのでは決してなく、むしろオカルト的であるということになるのであろう。

しかしながら、トールキンがオカルト主義者だというのは、結論を急ぎすぎているのではないかと思われる。例えば、イースターバニーやイースターの卵、クリスマスツリーなどは全ていわゆるヨーロッパの〈古代宗教〉すなわち、キリスト教から見れば異教の習慣を取り入れたものである。しかしながら、福音主義を自認する人々でさえ、イースターには卵を食べたり、クリスマスにはツリーを飾ったりなどすることは珍しくなく、通常、イースターに卵を食べるからといって、即座に彼らを異教徒だと断ずることはない。従って、トールキンの作品に福音主義者から見て〈異教〉の要素が見られるからという理由だけで、

『ロード・オブ・ザ・リング』及び筆者のトールキンがオカルトであると即断するのは避けるべきではないかと思われる。

他方、トールキンの著作に関しては、現在のカトリックとプロテスタント・リベラル派の採る解釈、すなわち、包括主義と多元主義にも言及しつつ検討する必要がある。キリスト教における包括主義とは、「キリスト教以外の諸宗教もある程度は神に近づくはしごであるが、それは短くて届かない。キリストの福音はそのはしごの不足分を補う」というものであり⁵⁾、キリスト教における多元主義とは、「キリスト教もほかの諸宗教もみんな平等に『唯一の实在』を求めているものであって、みんな救われているという主張」である⁶⁾。これらに同意する人ならば、トールキンの著作は問題なくキリスト教的、またはキリスト教信仰にとって有益、あるいはキリスト教信仰の妨げにはならないのだと主張することであろう。なぜならば、これらの主義・主張の枠組みの中では、エルフやドワーフなどのモチーフはキリスト教への entree (アントレ) であって、好ましいものであると考えられているからである。一方、包括主義や多元主義を取らない人々にとっては、エルフやドワーフや亡霊などの出現(これらは異教の産物である)はオカルトにすぎず、キリスト教信仰の妨げ以外の何者でもないということになるのであろう。

いずれにせよ、『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』をめぐる、キリスト教徒間の議論は、キリスト教徒の間に、様々な聖書解釈、信仰上の立場があるということを知る上でも、興味深いものであるといえよう。

〔注〕

1) 申命記 第18章 第9節～14節には、以下の記述が見られる。

あなたが、あなたの神、主の与えられる土地に入ったならば、その国々のいとうべき習慣を見習ってはならない。あなたの間に、自分の息子、娘に

火の中を通らせる者、占い師、卜者、易者、呪術師、呪文を唱える者、口寄せ、霊媒、死者に伺いを立てる者などがいてはならない。これらのことを行う者をすべて、主はいとわれる。これらのいとうべき行いのゆえに、あなたの神、主は彼らをあなたの前から追い払われるであろう。あなたは、あなたの神、主と共にあって全き者でなければならない。あなたが追い払おうとしているこれらの国々の民は、卜者や占い師に尋ねるが、あなたの神、主はあなたがそうすることをお許しにならない。

- 2) 魔法や魔術に対して、そのような警戒心や嫌悪感を抱くことの是非は別途議論する必要がある。
- 3) Tolkien, *Tree and Leaf* (邦訳『妖精物語について』) p.146 l.12-14.
- 4) 徳善義和・百瀬文晃編『カトリックとプロテスタント どこが同じで、どこが違うか』 p.172 l.6-7.
- 5) 水草修治『ニューエイジの罨』 p.95 l.7-9
- 6) 水草修治『ニューエイジの罨』 p.96 l.4-5

[参考文献]

- Abanes, Richard (2002) *Fantasy and Your Family*. PA.:Christian Publications, Inc.
- 藤城真澄&ホグワーツ魔術研究所 (2003)『マグル的<ハリー・ポッター>魔法序説概論』日本文芸社
- 水草修治 (1994)『ニューエイジの罨』CLC 出版
- Neal, Connie (2001) *What's a Christian to Do with Harry Potter?* Colorado Springs: WaterBrook Press.
- 日本聖書協会『聖書』新共同訳

Rowling, J. K. (1997) *Harry Potter and the Philosopher's Stone*. London: Bloomsbury.

Rowling, J. K. (1998) *Harry Potter and the Chamber of Secrets*. London: Bloomsbury.

徳善義和・百瀬文晃編 (1998) 『カトリックとプロテスタント どこが同じで、どこが違うか』 教文館

Tolkien, J. R. R.(1954) *The Fellowship of the Ring*. HarperCollins Publishers Ltd.

Tolkien, J. R. R.(1954) *The Two Towers*. HarperCollins Publishers Ltd.

Tolkien, J. R. R.(1955) *The Return of the King*. HarperCollins Publishers Ltd.

Tolkien, J. R. R. (1964) *Tree and Leaf* [J.R.R. トールキン 『妖精物語について』 猪熊葉子訳、評論社、2003年]。

[新聞]

2004年5月16日付 中日新聞サンデー版

[インターネットサイト]

Kjos,Berit (2002) *Tolkien's Lord of the Rings: Truth, Myth or Both?*

<http://www.leaderu.com/humanities/kjos.html>